

の本志なり、後來且、方便を設けて往生と名づけ見性と云ふ、豈夫れ兩般あるらんや、是等の意を見徹せざるが故に、禪者は淨業の行者を見ては無知昏惡の凡夫見性の大事有る事を知らず、妄に唱へて白晝に十萬億刹土を飛び過ごして、極樂國土に往かんことを、恰も跛鼈の身つくり、いして唐土へ飛ばんとするが如し、殊に知らず十萬億刹土は十惡八邪にして、佛智開明の曉、十惡八邪乍ち氷消して、當處即極樂國土なることを、云て輕賤す、又淨行の行人は禪門の諸子を見て、如來他力の大誓を信せず、自力貢高の我慢を主張し、大悟して生死を出てんとす、片腹痛き風情ならずや、未代下根の我等が及ぶべき事かは、宛然家鷲の大鷹と、羽節を較べ競はんことを、似たりと、慢侮す、法華の行者は乃ち曰く、吾が經の如きは三世の諸佛出世の本懷、一切如來成道の直路なり、此大切なる醍醐上味を捨て置き、稱名參禪は何の用ぞ、剩さへ妙經轉讀の法師を見ては、唯一乘の圓解を發せず、諸法實相の知見を開かず、只毎日喧々叫ひて、偏に春の蛙の畔にわめくに似たりなど、舌長き雜言を吐きて、如阿梨樹枝の金文をも顧みざる愚人、皆是邪魔外道の所行なりと、怒り恨

む、而して殊に知らず法華は阿含方等四味の階漸を越過し、開佛知見の至要を演ふるを、此故に本文に曰、開佛知見故出現於世と、正に知るべし、圓解の煥發を以て出世の本懷とすること、然らば則ち參禪も念佛も、其他看經誦經も、盡く是れ見道の補助にして、行路人の杖の如くなることを、杖に藜杖あり竹杖あり、藜竹品異なりと、雖其行を扶くるに於ては一なり、言ふことなかれ藜は可なれども、竹は不可なりと、若し夫れ行客心屈し、體疲れて起つ事能はずんば、藜杖竹杖何の用を成すにか、堪へん參禪亦然り、只肝要なるは行者勇猛精神の一念子に在り、云ふ事なかれ、話頭は是なれども、稱名は不是なりと、行人若し勇猛の志無くんば、稱名も話頭も、瞽者の眼鏡、法師の櫛、貯へ果しては何の用ぞ、此に數百の人員ありて、帝都へ行かんと欲して、各々糧を包み、村閭を出づ、然るに先導者善からざりしが爲に、錯つて遠境邊土、虎狼群集の曠野に彷徨し、徒らに日々杖の長短を争ひ、行裝の可否を論し、路費の多少を計較して、管杖々々のみ云ひ、路費々々のみ叫ひて、終に一步をも進む事を知らず、空しく歲月を送りて、歳衰へ體疲れて、果は虎狼の爲に獲られ、遠路邊

境の閑神野鬼と成り果てるに似たり、豈杖子の彼是を擇ひ、行装の如何を論ずるを要せんや、只一氣に進で退かず、速に京師に到達せば足らん、若し人今時の流潮に連れて、生前に佛力を頼み、死後に西方に往かんとならば、一生三昧發得、往生決定する能はじ、况んや眞正見性の大事に於てをや、眞珠庵主の歌に、行く水に敷かくよりもはかなきは佛を頼む人の行く末とあり、斯く云ふも強に淨業を嫌ひ、稱名を忌みしにわらず、念佛唱名若し、正念工夫相續不斷、見性了義の扶けにならば何ぞ厭はん、唱名可なり、念佛可なり、粉曳歌、田植歌をも唱ふべし、切に戒しむべきは見性の秘訣を放擲して、專唱の功德によりて佛土に生せんとする卑劣なる根性にあり、譬へば茲に萬石の大船あらんに、思ふ儘に舳し、順風を七合に受けて、舟歌を張り、檣柏子を揃へて、水主楫取心を合せ、千尋の波濤を押し切り、八重の鹽路を漕き抜けん、毎日勇み進むと雖、纜を解かざる間は徒に氣力を勞するのみにして、船は元の湊とに在りて動かさるべし、學道亦斯の如し、茲に一人あり、夙に靈骨ありて、英豪の氣を具し、神俊の才を備へ、馬祖百丈を師家とし、南泉長沙を同伴とし、勇猛の穎氣

を養ひ、打成一片に進み、純一無雜に修したりとも、命根を截斷せざる間は、因地一下の歡喜は努めく、これあるまじ、命根とは何ぞや、無量劫來相續し來る底の無明の一念子なり、天堂地獄穢土淨刹を化出し、三途六趣を現成することば皆是れ彼の力に依るなり、夢幻空華の細念なれども、見性の大事を妨ぐる事は百千の魔軍にも超えたり、之れを空華の細念ども名つけ、生死の命根ども名つけ、煩惱ども名つけ、陰魔ども云ふ、一實多名子細に看來れば、畢竟我見の法に歸す、有我に依るが故に生死あり、涅槃あり、煩惱あり、菩提あり、此の故に言ふ心生すれば法生じ、心滅すれば法滅すと又若し我相人相衆生相あらば、即ち菩薩にあらずと、佛、迦葉菩薩に問て曰く、善男子、何等の法を修して、大涅槃の法に契當する事を得るや、迦葉菩薩其時、五戒十善十八不共六度萬行八背遮無量の法門、逐一舉げて答ふれども、佛總て許可し、玉はす、迦葉佛に問ふ世尊、何等の法門か涅槃に契ふ事を得るや、佛曰く、但た無我の一法のみ、涅槃に契ふことを得たりと、然るに無我に兩般あり、常に心身怯弱にして、一切の人を恐れ、心氣を殺して、萬縁に應し、罵れども噴らす、打擲すれど

も管せず常に痴々呆々として一事を経ず一智を長せず我はは無我を得た  
 りとして足れりとなす人あり這は是れ一個の破飯糞泥猪の肥え腩れて一  
 切無智昏愚なるが如し是真正の無我にあらざるなり況や專唱の力に依り  
 て淨土へ行かんと計り佛にならん擬するをや行底これ何物ぞ成底これ何  
 物ぞ我にあらすしては何ぞや謂ふことなけれ然らば即ち是れ斷滅の見  
 地なりと是れ斷なりや是れ不斷なりや真正見性の上士にあらずんば輒く  
 知ること能はじ真正清淨の無我に契當せんと欲せば須らく嶮崖に手を撒  
 して絶後に再び蘇るへし斯くして始めて四徳の眞我に撞着せん嶮崖に手  
 を撒すとは何ぞや一人ありて誤つて人迹不到の處に到つて路頭の盡る處  
 身は是れ斷巖絶壁の上に在り瞰下すれば千尋の溪谷幽暗其底を涯るべか  
 らず纒に薛蘿を捉へ蔓葛に縋りて且らく懸絲の命を續くのみ忽然として  
 兩手を放撒せば七支八離枯骨復た求むべからず學道も亦如斯し一則の話  
 頭をどつて單々に參窮せば心死し意消して空蕩々虛索々萬仞の崖畔に在  
 るが如く手脚の着くべきなき去死十分胸間時々熱悶し忽然として話頭

に和し心身共に打失す是れを嶮崖に手を撒する底の時節と云ふ豁然とし  
 て蘇生し來れば水を飲で冷暖自知する底の大歡喜あらん之を往生と名け  
 見性と云ふ只肝要なるは此專念の扶けに依りて是非く一回自性の本源  
 に徹底するにあり毫末も疑ふべからず決して見性の外に淨土なく見性の  
 外に成佛あることなきなり

三界無比の大聖一切衆生の導師なりと世の渴仰を受け給ふ十力調御の世  
 尊如來も雪山に入りて一回見性し給はざりし以前は流轉常没の凡夫に同  
 じく八千度の往來を歴給ひき見性大悟の曉にこそ正覺の眉を開き給ひけ  
 る者を見性の外に成佛ありと心得見性の外に淨土ありと心得たる人は上  
 もなき不覺なるべし觀世大士の世身なりてふ二十八代の祖師達磨大師の  
 如きは遙に十萬里の波濤を凌ぎて諸經諸論に不足なき漢土へ如來直授の  
 佛心印を傳へんとて渡來したるが故に如何なる大事をや傳ふるらんと大  
 々括目して待ち居たるに達磨大師は只見性成佛の一事のみを授け破相悟  
 性の六門を説けたれども畢竟見性の一處に收歸せり然れども衆生無量な

るが故に、法門も又無量なり、就中往生の一門は韋提希獄中の難を救はんが爲に、假に且く設けしものにして、若し往生の一事を以て佛法の至要なりとせば、祖師只二三行の書を裁して、漢土に送らば足らん、曰く專唱稱名して淨刹に往生せよと、何ぞ煩はしく千辛萬苦の風波を凌ぎ、全身を鯨鯢の腮に懸けて漢土に渡るが如き危険を犯さんや、釋尊も亦然り初めより淨飯王の宮中に在りて、耶輸陀羅翟夷女等の妃嬪と共に娛樂を極め、位十善に登り、富五印を有つて、末後に稱名念佛して淨土に往生し玉は、足らん、何か故に金輪の王位を捨て、苦行六年、安羅々迦羅々の仙人に責め使はれ、其後雪山に入りて葦廬に股を突き貫くをも覺えず、目前に雷落て牛馬を打殺せるをも知らず、深く大禪定に入り給ひしや、而て遂に臘月八日の夜明星を一見して、初て見性大悟、高聲に唱へて、奇なる哉一切衆生悉く如來の如慧徳相を具有すと宣へ給ひしは何の意ぞや、世尊は是より山を降りて頓漸半滿の教を演説し、十力具足果滿妙覺の如來と仰かるゝに至り給へり、之れ彼の善慧大士の所謂頓に心源を悟て、寶藏を開くにあらずや、澆季末代壞却法滅の末世と雖、

佛子たらん者の尊信すべき芳躅なり、大凡番々出世の如來、歷代傳燈の祖師及び一切の賢聖智者高僧に至るまで、其所傳の秘訣行持の内證を探るに、盡く自性の法門を至要とす、逆如上人の如きも、平生往生不來迎の往生と説かれける由、願ふに亦是見性の眞理にあらずや、深く海藏の底を探て、五千餘卷の金文を五度まで究はめ、王侯より庶人に至るまでに、生身の父母の如くに仰き貴はれたる、法然上人の如きも、常に悲嘆して、特り教内の理に暗からざるのみにあらず、教外の心宗、頤を探ぐる先達なき故に、索短くして深泉を汲まず、翼短くして長空に翔らざる心地なりと、云へる由、教外の心宗とは何ぞや、此見性の法門にあらずや、至人の一言毫釐も欺くなし、寔に恐るべく敬すべし、神祇冥道も恭敬し尊重し玉ふ上人すら、斯く望み深く云はれし見性の大事を、今の人々の慢り謗るは、大なる罪惡なり。

惠心院の僧都は二十四歳にして、自性の大圓鏡を琢磨せんとして、横川に入り、晝は三部の法華經、夜は六萬聲の念佛、中間片時も怠惰なく、行年六十四歳にして始めて自身眞如なることを識得せり、寔に貴ふべき事なり、自身眞如

なる事を識得する時は山河大地森羅萬象草木國土有情非情同時に不變眞如の全體として現す是を寂滅現前見性了悟の時節とす高野の明遍僧都五十餘歳の秋深く念佛三昧に入り給ひしに高野大師正しく稱絲の袈裟並に一紙の金文を授け給へり其畧に曰く西方の一方を指す者は方便なり九域を簡して乱心を止む畢命を期として名を稱せば心眼即開の大益を得んと心眼即開直に是れ見性の時節なり大凡世尊一代五千餘卷の金文ありて頓漸秘密不定の妙義を説き給ひたれども畢竟此見性の大事を出でず故に曰く唯此一事實餘二即非眞と然に三世古今の間に見性せざる佛祖なく見性せざる賢聖は必定決定なき事なり野衲七八歳より心を佛理に傾け十五歳の時出家十九歳にして行脚二十四歳にして始めて此見性に撞着せり其後叢林を経て普ねく諸善知識の門閭に跨り博く諸經論を窺ひ畧三教の經典を探り及ひ諸子百家をさへに若し一法の自性の法門に超過せるあらば莊老列の道と雖も必ず信受し推し弘めんと誓ひたり爾來今年六十五歳に到て竟に見性に過きたる法理を見出す能はず

讀者若し不斷精進に一心不乱の田地に到らば必定大歡喜の眉を開き得へし若し夫れ無字を捨て佛名を唱ふるならば專唱稱名の力によりて見性分明に直に佛祖の骨髓に徹底せんことを期すべし之に反して見性明かなるを得ざるも稱名の功力によりて死後には必ず極樂に往生せん是れ一舉兩得萬全の良策なりとの底意あらば最早稱名の修業を放下し眞風を益害するの惡風俗杜撰の禪徒鄙俗下賤の邪見解者なりと謂べし  
夫れ禪宗は孤危の上にも孤危ならん事を要し祖庭は峻峻の上にも峻峻なるを貴しとす常に要津を把定して凡聖を通せず一言を出すときは三賢魂蕩し四果眼眩す一句を吐くときは閑神恐れ走り野鬼悲しみ哭す木人の腸を割き石女の髓を敲く棟梁の質ありて神俊の方を具する底の英倫の學者もまた蠱毒の郷を過ぐるが如く水も亦他の一滴を受けず堅に咬み横に參して情量の窟宅を破り智解の窠臼を抜き理盡き詞窮まり心死し意消して忽然として凡にあらず聖にあらず佛にあらず魔にあらざる底の奇怪の鈍瞎漢を放出して以て佛祖の深恩に報答す斯の如き手段を法窟の爪牙と名

づけ、釋名の神符と云ふ。

淨家は是に正反對なり、然れども是亦敬すべき一門なり、無量壽尊大慈善巧の專修にして、六八の大誓に基き、三四の修心を具す、専ら中下の機の爲に設けて、無智昏愚の衆生を利し、十惡五逆の罪累を抜き、攝取不捨の金言を主として、低きが上にも轉た低きを要とし、易きが上にも轉た易きを貴としとす、此の故に言ふ、縦ひ一代の教を能く、學びたりとも、一文不智の愚鈍の身になして、只た一向に念佛せよと、誠に澆季末代五濁惡世の邊土には、一日も欠くべからざる善巧なり、禪門は力士の長けを闘はしむるに等しく、高きを以て勝れりとし、淨家は侏儒の長けを闘はしむるか如く、矮きを以て勝れりとす、故に禪門の高きを惡みて是を廢せば、佛心向上の眞風は土を拂て泯滅せん、淨家の矮きを嫌て是を廢せば、昏愚無智の部屬は惡趣を出する事能はじ、願ふに佛陀は大醫王の如し、八萬四千種の方劑を設けて、八萬四千種の病根を抜く、禪と云ひ、淨と云ひ、教と云ひ、律と云ふ、各々是れ病に應ずる一方なり、譬は世に士と云ひ、農と云ひ、工と云ひ、商と云ふ、此の四民あるが知し、士は

智仁兼備へ、韜略並へ、全ふして、王位を鎮護し、逆徒を従へ、天下を泰山の安に置き、君を堯舜の君にし、民を堯舜の民にし、嗔らざれども、民斧鉞よりも畏る、尤も嚴重なるを貴しとす、之重んずべき美德なり、商は大店を張り、貨財を通し、錦繡綾羅絹帛綿布及び粟米、蔗果、魚肉をさへに、廣きを以て好とす、緇素男女老幼尊卑其の求めに應せずと云ふ事なし、士若し商買の廣きを羨み、財利を貪り行ひて、商賣の態をなさば、大に射御を廢し、武藝も亦忘れて、笑を朋友に惹かん、主人も亦大に嗔つて之を擯出せん、商も亦士の嚴重なるを羨み、劍を帶し、鞍馬に跨つて、戎面して、妄に東西に走れば、又それ大に笑はれん、家道も亦廢るべし、向きに所謂禪を得ずんば、命終の時、淨土に生せん、兩端に涉て修行する人は、魚も得ず、熊も得ず、却て生死の業根に培ひ、命根截斷、地一下の歡喜は、努めく、是あるを得ざるべし、無の字と名號と兩般なしと云ふも、得力の遲速、見道の淺深に到つては、多少の仔細なきにあらず、大凡辨道玄參の上士か、情念の滲漏を塞斷し、無明の眼膜を觸破するに到つては、無の字に超わたるはなし、此の故に五祖演禪師の

頤に趙州露及劍寒霜光焰々更擬問如何分身作兩段と總して參學は疑團の疑結を以て至要となす古人も大疑の下に大悟あり疑十分なれば悟十分なりと云へり又佛果和尚の曰く話頭を疑はざるを大病となす參立の士纔に大疑現前する事あらば百人が百人千人が千人ながら打發せざる事はあるはづなし若し人大疑現前する時只四面空蕩々地虚豁々地にして生にあらす死にあらず萬里の層氷裏にあるか如く瑠璃瓶裏に坐するに似て分外に清涼に分外に皎潔なり痴々呆々坐して起つ事を忘れ起て坐する事を忘れ胸中一點の情念なく恰も長空に立つか如く只一箇の無の字のみなり此時恐怖を生せず了智を添へす一氣に進んで退かざる時は忽然として氷盤を擲推するか如く玉樓を推倒するに似て四十年來未だ曾て見ず未だ曾て聞かざる底の大歡喜あらん此時に當て生死涅槃猶如作夢三千世界海中瀛一切の賢聖電拂の如し是を大微妙悟因地一下の時節と云ふ這裡の妙境傳ふる事を得ず説く事を得ず恰も水を呑んで冷暖自知するか如き也十方を目前に銷融し三世を一念子に貫通す人間天上の間那箇の歡喜か之に如か

ん是等の得力は學者親切に進まば纔に三日五日の功にして必ず得ん如何にして大疑現前する事を得るやとならば靜處を好まず動處を捨てず我か此の臍輪氣海總に是れ趙州の無字何の道理かあると一切の情念思想を抛下して單々に參窮せんに大疑現前せざる底は半個も亦無けん如上の大疑現前純一無雜の體截を聞きては怪しく恐ろしく氣味悪るき事に思はるれども無量劫來生死の重關を踏破し十方如來本覺の内證に徹底する程の大事なれば多少の困難は無かるべからず熟らく思ふに無の字を參究して大疑現前し大死一番して大歡喜を得る底は數多けれども名號を唱へて少分の力を得る底の人は未だ一個兩個より聞き及ばず此故に大事を了畢せんと欲せば無字を究明するに如くはなし古來臨濟德山汾陽慈明黃龍眞淨息耕妙喜の諸老が臂を袞け齒を切り手に唾して攘斥せしは敢て淨土を侮蔑し專唱を輕賤せしにあらす禪門に在りながら禪定を修せず參禪に懶く志行懶惰にして見性眼昏く禪學力乏しくして空しく一生を過ごし命日崦嵫に逼るに及んで來生永劫の苦輪を恐れ俄に欣求淨土の行課を勤め

在家無智の徒に對して、殊勝らしく説法する懶惰漢を排拆せしなり、以上は白隠禪師の念佛に對する見解なり、懈怠の行者を排するは淨土門に於ても同一にして三心不具の行者は決定往生叶ひ難かたきが故なり、終に淨土門に於て諍論の燒點となる諸行本願非本願の諍、一類往生二類往生の諍、一念往生多念往生の諍、報土化土二類有無の諍等を禪師の見地に立ちて回顧すれば、恰も盲人の象を議するを具眼者の傍觀せるが如く、噴飯に堪え難きものあり。

## 第二節 法華と禪

白隠禪師十六歳の時、咸慧房に妙典を借りて一讀し、其因縁譬喩説の多きに失望して、此經若し功德あらば、諸氏百家謠書妓典の類も亦功德あるべしと放言し、爾來再び法華を誦せざりしが、四十二歳の秋七月、法華の譬喩品を讀みつゝ、蜚聲の切々相連續するを聞き、豁然として法華の深理に契當するを得たりと云ふ、延享四年冬某尼の間に應へて、心の外に法華經なく、法華の外に心なし、三世の如來十方の諸聖も極處に至りては皆斯く説かざるはなし

と論じ來り、大に法華經の内秘を發揚せり。  
 大凡世尊一代頓漸秘密不定の法門ありて、無量の義を宜ぶる五千四十八卷中、其至極の旨は法華一部八卷に約り、法華一部六萬四千三百六十餘字の極意は妙法蓮華經の五字に約り、五字は妙法の二字に約り、二字は心の一字に歸す、然らば心の一字は何處に歸すべきや、兔角龜毛、過別山畢、竟如何欲知、無限傷春意、盡在停針不語時、此故に妙法の一心は展ふる時は十方法界を含有し、収むる時は無念無心の自性に歸す、此故に心外無法と説き、三界唯心と説き、諸法實相と説けども、其極處に到りては法華經と云ひ、無量壽佛と云ひ、禪門には本來の面目と云ひ、眞言には阿字不生の日輪と云ひ、律家には根本無作の戒體と云ふ、皆是一心の異名也、妙法蓮華經の五文字を一心の源を指す語なりと云ふは、五字即ち一心、不思議の徳を讃歎せし題號にして、一心本具の性徳を指し顯はしたる言なるか故也、請ふ這裡に向て其理由を問ふを止めよ、書畫管弦の妙は只妙なりと云ふに止まる、其理由を問ふに於ては説明以外なり、父子間も傳ふる能はざる妙理は、説くべからず教ゆへからざるも



のなり、人々具足の妙法の心性も亦斯の如し、吾人の喜語談笑する底は何ものぞ、内に向て尋ねるに聲もなく臭もなし、有と云はんか有にあらず、無と云はんか無にあらず、言語道斷、脱洒自在なる處を假に且く妙法と名く、蓮華とは蓮の泥土にありて、泥土に汚されず、妙なる色香を失はずして、時來れば麗しく咲き乱るゝ如く、一心は衆生の中にあるか故に穢れ、佛になりしか故に淨くなりしと云ふか如きものにあらざるか故に、蓮華に譬へたる者なり、斯くして人々本具の佛心を妙法蓮華と名げたる事疑なき事なり、而て經とは常の義にして、常住佛性の義を顯す、常住佛性とは此心性は佛に在りても増さず、衆生に在りても減せず、天地と同根、萬物と一體にして、曠劫以前曠劫以後少しも變易なき處を指して經と名けしなり、然れば妙法は佛心の體、蓮華經は佛心の妙法を譬を設けて讚歎したるものにして、畢竟一實二名恰も餅をおかちんと云ふか如し、故に眞實の法華經は手にも把られず、目にも見えざる者なり、然らば如何にして受持すべきぞ、如何なる人を法華の行者と云ふや、之れ答へざるべからざる問なり、蓋し衆生に三種の機根あり、下根の行

者は黄卷赤軸を捕へて讀誦書寫解説し、中根の行者は自心を觀照して此經を受持し、上根の行者は眼に此經を見徹し、自心の面を見るか如し、涅槃經の如來目見佛性とは即是なり、法華經の行者は大乘至極の眞修なれば、甚だ容易の業にあらず、天台智者大士曰く、手不執卷、常讀是經、口無言音、遍誦衆典、佛不說法、恒聞法音、不思惟、普照法界、とは眞正誦經の面目なり、試に問ふ卷を執らずして誦する底是れ那箇の經ぞ、自心妙法にあらざして何ぞや、次に思惟せずして遍く法界を照すとはは何者ぞ、是眞正の蓮華にあらずや、是を無字の經と云ふ、徒らに黄卷赤軸をのみを把へて法華經なりと偏執する輩は、藥帖の記を舐りて藥なりとし、以て病を治せんと計る者の如し、大錯了なり、若し人此經を持せんと欲せば、十二時中胸中一點の缺曇りなき、不思議、不思惡の當體を工夫せざるべからず。

捨得の偈に欲識無爲理、心中不挂絲とある如く、三世の如來も一切の智者高僧も、皆斯の如くにして大悟得道せるなり。

斯く正念工夫の眞修は一念不生、前後際斷、頓悟成佛の直路なれば、如來の此

經難持と宜へ給ひしも道理なり、大凡三教の聖人も實處に到つては大段同一なり、其進修の淺深精麁によりて、得力に高下あるも、最初一步の趣は相等し、儒門は此處を至善と云ひ、未發の中と云ひ、道家は虛無自然と云ひ、神家者は高天原と相傳す、天台には一念三千止觀の大事とし、眞言には阿字本不生の觀法と云ひ、家々の祖師坐禪を勸め、誦經を勸むるも、誦みく唱へくして一心不亂、純一無雜の田地に到らしめん方便なり、若し人法華經内面の眞意を見徹したらんには、咳唾掉臂、動靜云爲、草木瓦石、有情非情、悉く皆妙法蓮華經と現成するが故に、十二時中此經と冥合す、然るに眞の法華を見る能はずして、徒らに法華經を奉持せんと擬する輩は、譬は此所に人ありて、手に一椀の水を擎けて、動かさじ漏さじと、日夜に慎み守りて、養ひ増さん願ふが如し、縦ひ一生擎け守るも、養ひ増す事は存じもよらぬ事なり、加之自家の飢渴も亦救ふ事能はず、若し眞の法華を一見して、此經を持する人は、彼の一椀の水を江湖に投ずるが如し、忽ち三萬六千頂の煙波と混合し、德澤を大湖と共にして、飛ぶ者、翔る者、走る者、益く者、同く共に行きて、呑まんに盡くる事なし、

眞の法華を見ざる人は、一椀の水を擎くる人の如し、他を利用する事能はざるのみにあらず、自己も亦利する事能はじ、此故に一切諸經を熟讀せんよりは、須らく眞の法華を一見すべし、無量の寶塔を修造せんよりは、須らく眞の法華を一見すべし、百千の佛像を造立せんよりは、須らく眞の法華を一見すべし、三界の秘密を學得せんよりは、須らく眞の法華を一見すべし、黃卷赤軸のみを把て、法華經なりと偏執せんよりは、須らく眞の法華を一見すべし、口に百千萬部の法華を讀誦せんよりは、須らく眼に一回眞の法華を見るべし、然らば如何にして法華の面目を徹見すべきや、他なし先づ須らく大疑團を起すべし、法華の眞面目とは何物ぞ、自己本有の妙法すなはち一心也、然らば先づ自心を見ざるべからず、自心とは何ぞや、赤なりや、青なりや、勇猛一番大誓願を發して、晝夜に參究せざるべからず、自心を參究する行持甚だ多しと雖も、法華經の行者は法華三昧の行持たるべし、法華三昧の行持とは嬉怒哀樂に關せず、行住坐臥只管に南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經と間斷なく唱へ續け、此唱題を杖柱として、出る息入る息をも題目として、熱心に唱ふべし、唱

へ、て怠らざれば、久しからずして、心性儘に安住不動となり、須彌山の如き心地ほのかに自覺せらるべし、其時たゆまず唱題を繼續すれば、自然に正念工夫の大事に契當して、平生の心意識情都て行はれず、金剛圈に入るか如く、瑠璃瓶裏に坐するに似て、一點の計較思想なく、忽然として、大死底の人と異なることなけん、纒に蘇息し來らば、覺えず、純一無雜、打成一片の眞理現前し、立處に法華の眞面目に撞着して、忽ち身心を打失し、本門毒量久遠成實の如來は、目前に分明にして、推せども去らず、此時に當て、天台の法性寂然、寂而常照の寶所に投入し、眞言の阿字本不生の惠日に照され、律宗の諸佛無上の金剛寶戒に冥合し、淨土の即心往生、極樂報土の素懷を遂げ、水鳥樹林念佛念法、念佛の妙莊嚴を目のあたり見届け、娑婆即寂、光淨土の正眼を開き、草木國土悉皆成佛の田地に到らん、事毫釐も相違あるなし、人間天上の善果何事か、是に如かん、是即三世諸佛の本懷なり、一遍の題目は禪門一則の話頭と更に異なる事なし。

今時一種の言者あり曰く、參禪は無益なり、話頭了して何かせん、即心成佛の

直指なれば念の起るをも愁へず、念の止みたるをも喜はず、山賤の白木の合子、只生れつきたる自性の儘なるぞよき、漆つけねは剝色も無しとて、日々徒らに盲龜の空谷に入るか如くして、以て足れりとなす、此輩の所見は、天竺の自然外道の所見也、恁麼にして佛心向上の宗旨なりとせば、七村裏の老夫も亦掌を撫して大笑すべし、他なし、是れ總て長沙の謂ゆる識神を認得する底の痴人なるか故なり、楞嚴に賊を認めて子となす、終に元淨明の體を知る事能はずと呵せられしは、是等の部類なり、知らずや、如來は四果の聖者の諸漏已に盡し、我法の眞理に達し、神通具足し、名稱普く聞ゆるも、禪を知れるものなりと許可し給はざりしを、經に曰く、我弟子大阿羅漢、不能解此義、唯有大菩薩衆、應解此義と、然れば見性の功なくして、妄に自ら尊と稱する、是れ何の心ぞや、人は只萬縁を放擲して、唱題專心なるに如くはなし、然れ共題目にのみ偏執して、他を貶するは不可なり、眞言淨土何れも優劣のある筈なし、淨家人は專唱稱名によりて、唯心の淨土、已身の彌陀の妙相を見届け、眞言の人は陀羅尼微妙の威力に依て、阿字本不生の大日を拜するを得るは、禪門に於て

一則の、話頭を、擧揚し、實證悟するに、同じ、死後に、於て念佛唱題の功を收めんとは、不覺油斷の至り、覺束なき次第なり。世は末世なりと雖も、法は毫も末世ならず、然るに近時惡習俗起りて、徒らに見聞の學を好み、妙法の佛心を見んとするもの、殆ど地を拂つて求むる能はず、實に淺間しき澆季ならずや。身に餘る田地を譲り受けたる農家の嗣子、惟へらく今時吾等風情の柔者ひはすもの共が、先祖の人々の眞似をなし、耕作などして、多くの妻子眷屬などを養育せんと計るは、及び難き事なり、肩ありて着すと云ふ事なく、口ありて食はずと云ふ事なし、如かじ貧窮下賤に身を下し、他人の扶助に縋りて、一身を安穩に過ごさんにはと、自己の勞力を措しみて、下賤に身を處す、是自暴自棄の人なり。臨濟大師は此徒を甘んじて、下劣の人となる輩なりと呵責せられたり、之れ恰も魚の水中にありて、水を求めず、鳥の長空にありて、長空を求めざるに似たり、彼等は十方法界の中、眞如ならざる國土なく、妙法ならざる衆生なき事を知らず、唯心の妙法、寂光淨土の眞中に住みながら、生前には娑婆なりと偏執し、衆生なりと妄想し、死後には地獄なりと見錯り、無間なりと泣き悲しむ

事、皆是目前に充ち溢れたる妙法の佛心、前後に澄み湛へたる法性をば放棄して、猥りに妄情常識を頼み慕すより起る結果なり。惜哉三界無比の妙法醍醐上味の經典も、行者なければ傍間の雜書と共に、空しく書庫裡に蠹魚の餌となりたり、遂に復た開佛知見と云へる法華方便品の眞意を了畢する能はず、只管外にくと尋ね求むるは、譬へは大福長者ありて、自己の艱難辛苦によりて、多くの財産を得て子孫に譲り與へしに、或は帳面のみを繰り返して、實際の財産を忘却せるものあり、或は徒らに乞食に下りて身を苦しめ、以て祖先の艱苦を味はんとするもの等、法華經中の所謂窮子はなり、悲哉妙心を草紙に求め、正法を口談に求む、此大事若し紙授口傳にて濟むべくんば、神光の臂を斷ち、玄沙の足を傷ひし等の苦行解すべからず、吾人豈究めざるべけんや、眞實に唱題怠らざれば、決定必定自性の妙法蓮華は、魔はしく現前すべし、釋尊と雖自己本心の妙法を見届けざりし間は、流轉常没の凡夫にして、生死往來幾度もあり、未後雪山に於て自心の妙法を見届けてより、始めて正覺を成し給ひしなり、豈文字言説の能く傳ふる處なら

んや。  
 或は八識願耶の無分別識を認めて本來の面目なりと合點し妄念さへ無くば其迹は鏡の如き佛心ぞと心得只鏡の萬境を映して柳緑花紅を照せども毫釐も迹を留めざるが如く晝夜に妄念を拂ふて留めざるは瓦を磨き粟稗の鳥を逐ふが如し是を識神を認むと云ふ山河大地を照破せる光明は這裡にあらざるなり是亦法華の窮子なり長沙大師の偈に曰く。

學道之人不識眞  
 只爲從前認識神  
 無量却來生死本  
 痴人喚作本來人

見性の外に佛法を求むれば轉た尋ねて轉た遠く法華の面目遂に求むるを得ざるべし眞正沙法の行者は即ち然らず專一に自己本有の妙法は何ぞやと佛を求めず祖を求めず只管妙法の所在を研參し十二時中一切處に於て間斷なく勇猛の志氣を鼓舞して無念無心に妙法蓮華經々々々々と唱題せば法華の面目自然に現前して自性明白の期至るべし。  
 是遠羅天釜に記せる大要なり法華經の眞意を了せずして徒らに祖師の熱

罵のみを繼承し折伏の一事以て祖師に恩を報し得たりと思惟する偏見深き日宗門徒なきにしもあらず斯くの如くにして本門相承の法華の眞意那邊にか求むべきや上行菩薩より繼承せりと云ふ日蓮が契當底の一物恁麼にして相續し得べきや難哉活ける法華の繼承。

第三節 儒道と禪

元祿の頃には山鹿素行の復古學に次て伊藤仁齋出て古學説を唱へて頻に宋學を排し大學は大戴禮の脱簡にして孔子の遺書にあらず道は唯唐虞を以て準し學は離魯に従て傳ふべきなりと揚言し論語を以て最上至極宇宙第一の書なりとなし萬世道義の規矩準繩なりとして孔孟以來儒道の正脈傳はらずと慨し孔孟之直指見於論孟二書者炳如丹青包含天下之理而無缺會萃百家之典而不遺出於此則旁徑也他岐也と云ひ朱子を罵つて正學の罪人なりと貶するに至れり又一方には荻生徂徠一代の英邁を以て古文辭學を唱導して熾に近世の儒流を罵倒し孔子之道者先王之道也先王之道安天下之道也と論じ先王の道は禮樂の二にあり宋儒の所謂事物當然之理等

は空論にして、敢て聖人の説かざりし處なりと論するに至れり、是等復古の影響は國學にありては、荷田春滿を出たし、契沖を出たし、加茂真淵本居宜長の徒輩出して國學の隆盛を極め、徂徠の下に大宰春臺を出たじ、仁齋の下には東涯、梅宇、介亭、竹里、蘭謁の五兄弟ありて共に父の學を繼承し、復古の思想は日本の思想界を風靡するに至れり、白隱禪師此間に處して、竊に學海の潮流に嫌焉たらざるを得ず、廣瀬某に與へたる書は這般の消息を示せるものなり、兎に角に三教の學者何に限らず、第一に大道の淵源に徹底不致候ては、何事も夢幻の如くにて、確と致したる心地は無之候、故是非々々一回大道極則の處を見徹致す様、勇猛の御志肝要に御座候云々、間斷なく進み候は、忽然として大歡喜有之べく候、是所謂鳳金網を離れ、鶴籠を抛つ底の時節にして窮すれば變ず、變ずれば通すとは、此等の趣に御座候、茲に於て孔夫子の一以貫之、孟軻氏の浩然氣は、彙乎として目前に分明と相成り可申候、此の處を朱子は力を用ゐること久しくして、一旦豁然として通すと申候、朱晦菴も前方に密々參禪工夫致したる由にて、一旦入理の得力は、粉れもなき大人に

御座候然れども、猶最後兩重の關鎖ありて、祖庭は天涯遙に懸隔致し居り候、近代朱子流の學を嫌ふ人も多き由、其は甚だ狭くるしき了簡に御座候、聖人には常師なしと申す、事の侍れは、朱子に限らず、婦人小人の語と雖、實學の助けとならば捨て措かずして工夫を下し、力を用ゐる様に心懸け候をこそ學好む人も、達人とも申すべく候、只手前の淺はかなる了簡を待みて、先賢を輕じ、契はぬ小智を飾りて、彼是と評判致し候は、片腹痛き事共に御座候、澆季未代の風俗は、儒者も佛者も、精神軟弱にして、根機下劣となり、世智濃厚にして、實徳薄く、易きを好んで難きを恐れ、淺きに走りて深きを棄て、近きを執らへて遠きを顧みず、道は只君臣父子彝倫の間を出でずとばかり心得て、上もなき聖經賢典を判棄致し、及びもなき實徳純善の君子を捉へ、唐宋の儒者は取るに足らず、杯沙汰致し、甚だしきに至ては、孔孟以來正見底の人なし、なごど申居り候と述べ來て、暗に仁齋一輩の狹量を排毀し、密に唐宋の學者を點檢し來りて、大道の眞面目を擧揚せんとせり、乃ち語を繼て曰、彼輩は漢に傳教あり、牟子あり、吳に大傳闢澤あり、普に隆遺民あり、陶元亮あり、唐に虞世

南社如晦あり、房玄齡蕭瑀あるを知らず、彼の善惠大士季長者及び寒山拾得の二賢士の如きは、各大權の垂跡補處の化現にして、是を散聖と云ふ、凡愚の輩の漫に可否すべき類にあらず、龐道玄、季附馬、揚大年、陳尙書等の四君子の如きは、見道分明にして、精く參禪の玄微を盡くせり、四海の衲子天下の老和尙、其名を聞く時は、牙戦き股震ふ、郭功甫、張商英又之に次ぐ、張拙秀才、陸亘太夫、美光、妻相國、虞齋林先生、白居易、周敦頤の諸君子、及び二程子あり、三蘇あり、張九成あり、呂居仁等の諸老漢、唐より宋明に到りて、俊才星の如くに列り、賢良恭の如くに、精しく儒域の堂奥を窺ひ、深く禪海の玄底を探る、今時の儒釋の學者、彼等の杖履に侍する事も、亦能はざるべし、孔夫子の道、若し今人の心得るが如き、彝倫の間のものならば、顔子陋巷に遁れて、枯淡を嘗め、原憲漏室に潜みて、窮困を守りしは、怪しき事ならずや、然るを回や三月仁に達はずと、孔夫子の賞賛せられしは何の意ぞや、夫子二賢も道は彝倫の間に在るを知らざりしと、なすか、何ぞ然らん、さは云へ誤解するなかれ、余は敢て彝倫の間に道なしと云ふにあらず、只彝倫の間にのみありて、外に求むる事を

認めざるを難するなり、若し道を君臣父子彝倫の間のみと云はば、大舜は須臾も離るへからざる道を離れて、湘水に遊きて空しく、一雙の緑竹を留め、大禹は須臾も離るへからざる道を離れて、洪水に外にある事三年、文王は須臾も離るへからざる道を離れて、羨里に囚となり、太公は須臾も離るへからざる道を離れて、涓水に釣し、周公は須臾も離るへからざる道を離れて、上帝に仕へん事を求め、夷齊は歳を首陽に採り、李聃は青牛に跨りて函關を出で、孔子は糧を陳蔡に断ち、孟軻は轍天下を廻り、子路は衛國に義死し、百里奚は虞を棄て、秦に入り、季札は列國へ使し、靈均は海水に沈み、退之は潮州に左遷せらる、其餘の孔門三千の英豪、皆是須臾も離るへからざる道を離れ來りて、孔子に學ぶ、如斯古の道を離れたる人、多くは聖賢の名を得たり、然るに今豪家富人の子弟を見るに、皆妻奴の愛に引かれて、室家を離るゝ事、片時も忍びざる風あり、是等の徒を以て道を好む事、聖賢に勝れりとせんか、且つ道は庶人に多くして、聖賢には却て乏しきものなりと云はんか、浮圖氏の彝倫を離れて道を求む、是甚た惡むべきものにあらずや、と論し來り、孔子顏回兩者の

内面的觀察を遙くして、孔子か回や三月仁に違はずとの所謂仁とは顔回の所謂前にかゝるかと思はれ、忽焉として後に在る底の大道にあらずやと云て語を次ぎ、此時舞倫の大道顔回を慕ひて窈に來り、陋巷に在る三月回をして仁に違はしめさりしか、將た又顔回大道を慕ひて家に隔たる事三月、夫婦昆弟の間に交りて仁に違はざる事を得たりしか、或人曰く、忽焉の語は回か未だ道を見ざりし時の語なりと、怪哉、回未だ道を見ずして胡爲れ、此奇怪の言をなすや、醉夢の狂言か、疫熱の譫語か、纔に貳萬三千字の金文、未だ道を見ざる門人の閑語を載せて何の用やある。

知らずや、顔回三月仁に違はずして、初めて諸般の親切の語を説き得ること、を是れ他の七十子の夢にも嘗て見ざる處なり、夫子常に孝悌忠信を談じて弟子を教へて、客まざる事水火の如し、然るを子貢云はすや、夫子の言性と天道とは得て聞くべからずと、而して晦菴下に註して曰く、性と天道とは到りては、夫子罕に是を道ふのみと、怪哉、道若舞倫の間に在らば、罕に道ふとは何の道ぞ、或人曰く、夫子の道は人道なり、天道は罕に道へるのみと、余惟へらく

然らば、天道は別に高遠の處にありて、人道とは卵肉の黃白別在せるが如く、宇宙の間に兩道別立して存在すとなすにや、然らば、夫子の我が道は一以て之を貫くと云はれたる言解すべからず。

學人若し人道を見徹せざる時は、見地明かならず、明かならざる時は、中心疑て決せず、決せざる時は、言語必ず支離す、如かす一回大道を見徹して平生を輕快にせんには、熟々思ふに罕に道ふの語は、朱貢二子の心にして、必ずしも夫子の心ならし、夫れ夫子の道に於ける融鎔無碍玉盤に明珠を走らしむるが如く、光々映徹すること、一器の水を江湖に投ずるが如し、纖毫ばかりも縫罅なく、純々焉たり、混々乎たり、偃仰屈伸、咳唾掉臂、總て是れ大道なるものは、特り只夫子歟、里仁鄉党の二篇の如きは、佛に法華あるが如し、是を讀むに覺えず、人の心をして消和せしむる事、朝曦の霜露に於けるが如く、千載の下、嚴然として在すが如く、感せらる、縱令海口も贊嘆し及ばざるなり、然るを今時往々に云ふ、里郷二編は、孔夫子恭謙閑雅の態度、風流溫籍の體裁にして、聖徳の餘波枝末なり、講するに足らずと、錯れる哉。



夫子曰く我爾に隠す事なしと隠さざる底は何ぞや學者尋常此語を三復せは必ず里郷二編常情の量るべきに非らざることを覺得せん而して後に罕に性と天道とを道ふの語果して夫子の心にあらざることを了知せん嘗て禪を學で且つ儒を明めたりし人あり是實に自性の根本に徹し大道の玄微を洞照し儒教の淵源を貫通したる人にして寔に人中の英傑なり何を以てか如か云ふとならば夫れ禪の會得し難き中々庸才懦弱の士の及ふべき事にあらず然るを信得及し透得過する底の人三教の間に毫釐も凝滯の是れあるまじき事は少しく參禪に覺えあらん人の疑はざる處なり大凡佛理の玄底を究むる時は必ず仁道の根本に徹底する事は必然の義なり故に仁は中下の士の努々量り知るべき處にあらず韓愈の所謂博愛是を仁と云ふと言へるか如き麤雜なる解釋にあらず孔夫子も敬ひ慎まれし處にして孟武伯子由公西華等の人々にすら仁を知る者と許可せられざりしなり斯く言へばとて貴翁も今日より禪學に入り給へ禪を修し給へと例の浮圖氏の癖にて勸むるにはあらず縦ひ貴翁禪を修し給ひて大智眼を開き大歡喜を得

給ひたりとも左のみ佛法の大光明と申すにても無之禪學の大威徳と申すにも侍らす然るに斯くも長々と書き付くる次第は貴翁も一方の人傑にて年久しく三教の間に心を寄せられ修練の志も淺からざる人にて侍れば逆もの事に大道の本源に徹し仁義の淵底を明らめ大怡悦を得て安堵の眉を開き給へかしの方寸の親切のみ只今迄の御修業だけにては一生涯はかばかしき得力も無くて過こさるべからず  
 晦菴か異端の虛無寂滅の教は其高き事大學に過ぎたるも實なしと言ひしは是晦菴か排佛の暗疾妬害の陋臆より起りし取るに足らざる鄙辭なり夫れ真如の海廣く法性の天廓なり大千を瀛沫に屬し賢聖を雷拂に空す暗愚無智の輩俄に之を聞かば誰か驚怖せざらむ譬へは海島邊鄙の細民深山三家の野人に向て長安豪家の富貴帝都樓觀の莊麗を談せば驚き疑ひて必ず謂はん其麗しき事草舎に過ぎたれども實なしと然れども豪家は野人の疑怪を恐れて毀つべきにあらず舊井田疇の蝦蟇山溪汚池の鮪鮓に對して北海の波瀾南溟の浩渺を談せば必ず疑ひ言はん蛟龍海若南溟の淡其大なる

事池井に過ぎたれども實なしと、是等豈帝都紅海の罪ならんや、佛に半滿權實の經卷あれども、高きを談せず、低きを説かず、只未代の行人をして高からず、低からざる底の本具の大道を知らしめんとするなり、機根熟大の衆生の爲には、方廣華嚴の大旗を弄し、珍御寶聚の大衣を著し、小根劣機の衆生を化するには、鹿苑草舎の小乗を談し、麤弊垢膩の衣を纏ふ、有爲住相の衆生を化するには、寂滅無相の空理を談じ、高踏驕奢の異學を化するには、高廣寛大の法體を示し、大凡八萬四千の法門ありて、無量解脱の妙義を具す、是を利生の法財と云ふ、譬へは世の良醫の肩輿に駕して無心にして即ち行く、胸中初めより一方のあるなし、病床に近づき、強弱を見、九候を窺ひ、五内に察して、而て後に種々の方劑を投する、か如し、其補瀉涼温は病者に應じて用ゐるのみ、豈一方を以て良醫を誹謗して可ならんや。

或は王者の叛國を問はんが爲に、王庫數千種の兵器あるが如し、夫れ兵は不祥の器にして止む事を得ざる時は用う、豈王者の常ならんや、法財亦然り、豈佛の常ならんや、大小の老儒惜むべし、排佛の妬眼、佛道の高明なるを明らめ

ず、識量狭くして大學の寛宏なるを量らず、若し大學の高明なるを明らめば、佛道の高明なるを怪まし、佛道の寛宏なるを量らば、何ぞ大學の寛宏なるを知らざらん、彼の清淨寂滅の諸説の如きは、有爲住相の衆生の爲に設く、有爲住相の病癒へなば、何ぞ寂滅の藥を留めん、然るを寂滅の所説を以て、佛教を高しとして是をなみせば、衆旨の象を探りて終に全象を見る事能はざるが如けん、夫れ山は頂を窮めざれば遠きを見る事能はず、海は底を盡さざれば深きを量る事能はず、佛教は高しとて忌み棄て、道教は深しとて恐れ避け、孔子の道は彝倫の外に出でずと、徒に益々祿々として、他暖のみを求めて、内妻妾の愛に引かれ、外名利の私に蓋はれて、舊に依て、只是れ一個の凡愚のみ、何の力ありて君を堯舜の君とし、民を堯舜の民となす底の盛事あらん、實に憤飯の至りなり、大丈夫兒學はすんば、即ち止まん、若一日と雖も學を好まば、高きを窮め、深きを探りて、誓て大道の源底に徹し、人欲の私を捨て、人に過ぎたる知見を具し、能く人を教へ、衆に超へたる識量ありて、能く衆を導くべし、若し夫れ人道を見ざる時は、其志高からず、凡愚の舊識に牽かれて、鄙

俗の情念に蓋はれ、人欲の私に勝つこと能はず、四端を養ひて能く仁に能く  
義ならんと欲するも豈得べけんや。

君子は然らず、能く高遠を窮めて近習を救ひ、能く寛大を盡して鄙微を助く、  
此故に上世の聖君明主は尊を屈して卑に付き、已を虚にして士に下り、惟道  
惟求む、黄帝は三七齋戒して道を黃成子に問ひ、且大真に學ぶ、堯は伊壽に學  
び、舜は務成跗に學び、禹は西王國に學び、湯は威子伯に學び、文王は郭政に學  
び、周公は太公望に學び、孔子は周に行きて禮を老聃に學び、孟軻は業を子思  
の門人に受く、君臣主従と安行生知の彥聖すら學を好む事斯の如し、豈夫れ  
空しく彝倫の間を出てずと言ひて、道を求めず、學を修せず、面に牆して一生  
を錯るべけんや、須く知るべし、苦しみ勸めて道を求め、而る後に凡にあらす  
聖におらず、眼横鼻直、進み勵んで學を究め、而る後に智にあらす愚にあらす、  
喫茶喫飯、只是尋常無用高閑の一老翁なる事を、此に於て室家に宜しく、郷党  
に宜しくして、能く君臣父子夫婦昆弟の間を治む、縦ひ王侯の傍に在りて、天  
下の政事を佐くと云ふとも、何の不足の處か、是れあらん、君は信じ、臣は敬し、

士は伏し、民は懐く、位人臣を極むるとも、誰か怪しむ事や、あらん、國強く民康  
く、寔に人中の龍鳳なり、是大丈夫萬夫に傑出する者の懐とする所にして、宋  
朝の張商英無盡居士の如きは、是其人なり、官宰輔に登り、壽百齡に近くして、  
天下を泰山の安きに置く、是れ先に所謂禪を學んで、儒を明むる底の名教の  
老君子なり、彼をして禪を説かしむれば、衲僧眉を維め、三賢四果魂膽を驚落  
す、今時釋儒の學人、百端を究めて窺ひ探ると雖、斯家の門間戸庭も臨み見る  
事能はず、背後に立つ事も亦得じ、未代の悲しさは、人毎に外學を勤めて、内却  
て實徳を排せんとす、佛者は儒人に交るを見て、喬木を下るの意をなし、儒人  
は佛者に交るを見て、幽谷に入を思を生ず、而して特に人々儒佛の名を以て  
も染汚すべからざる實徳の存在を知らざるなり、夫れ人の性の上には一物  
をも添ふべからざるは、恰も紅爐の雪片の如し、儒佛は名にして皮毛の如し、  
大道は實にして骨髓の如し、有道の士は大道の骨髓のみを見て、皮毛の儒佛  
ある事を見ず、輕薄の徒は骨髓の大道を求めずして、却て皮毛の儒佛を隔て  
て、甚だしきものは冠雉の如くにす、是れ誰か過るや、只是古學亡びて、至道隱

私

れ鄙習盛にして實徳を棄るの致す處なり。  
 貴翁も亦他日功充ち學成せん時儒たる事なけれ佛たることなけれ名もなき自性を捉へて儒と名づけ佛と稱するものは好箇娘生の好面皮人を儲て苦ろに黥するが如く好肉を割りて瘡を生じ自ら己命を喪するに似たり往々に儒人は儒にも非らざる心性を捉へて強て拗へて我は是れ儒なりと稱し佛者を譏貶し佛者亦錯りて佛に非らざる明德を捉へ強て拗へて我は是佛者なりと稱して儒門を輕賤す點檢し見來れば總て是大道の根本を見ず自心の玄微を窺ひ知らざるの致す處にして學力淺薄なる驗なり。  
 人々本具の佛性は是を菩提と名づけ涅槃と稱し儒門は是を至道と名づけ明德と稱す季聃は虛玄と名け孟軻は浩然と云ふ各々の所見深淺なきにあらずれども只是一なり一なりと雖も諸稱一も相當らず是を儒なりと言はんと言すれば丈夫面上に眉を畫くか如く是を佛なりと言はんと言はんは新婦領下に鬚を栽るか如く傍觀腹を抱へざるを得ず儒にあらず佛にあらずして能く仁に能く義なる物は只其れ心性か徳天地に齊しくして邊表を見ず

明日月と並ひて終始なく天地と一なる底の大物は儒佛の間に隱藏すべからず陰陽を吞吐し造化を取放し春花秋葉皆此恩力を受く是の故に言ふ聖人は有言の天地なり天地は無言の聖人なりと自ら佛と稱し自ら儒と稱するものは郎を呼んで奴となす終に實徳を失し覺えず二教の區域に投入して互に吳越相隔つ豈大錯誤にあらずや然りと雖も儒を廢し佛を除きて而て後に道を知れりなすにあらざるなり。  
 夫れ儒佛二教の世に並ひ行はれて貴きは上政化を輔け下國家に利あるか故なり然らば此任に當る人豈容易ならんや刻苦精勵して一旦心地開明し智光煥發し理事貫通し物我冥合せざる時は彼の人欲の私に克つ事能はず縦ひ才藝他に超え財あり學あるも只是れ少しく文學を解する底の凡愚のみ何の實徳ありてか人世を利する底の盛事あらんや若し人參禪苦學して見性了々分明に掌上を見るか如くなりて而て後に人世を利するに便あらは儒と言はんも亦可なり佛と言はんも亦可なり莊老列と稱する亦嫌ふ處にあらず是に反して毫釐も見道の方なくして謾に輕薄の凡解を持せば儒

と稱するも不可なり、佛と稱するも果た又老莊列と稱するも總て不可なり、請ふ余輩の言の是非を問はず、唐儒宋儒の力を盡したる根底に透徹して、而して後に取捨せよ、只臆測を逞くして、猥り彼是了簡するは、達人の行爲にあらざるなり、近代の儒家及び神道者は、總に五七卷の書冊を讀み、三五月の講讀を聞く時は、妬火竊に起り、嫉焰俄に熾にして、排佛を以て急務となす、嗟佛の爾に於ける、何の科あるや、爾の佛に於ける何の冤あるや、只是暫時の妬忌に蓋はれ、神理の如何を辨へず、佛乘の如何をも察せざるの致す處なり、

愿に佛は三世通貫の大聖なり、神も亦三世洞明の佛と異なる事なし、是内秘同體なるが故なり、夫れ我が六十余州の扶桑、八萬軀の鎮座ありて、高明の徳を懷き、靈驗妙應寔に在すが如し、佛日桑枝に上りてより、千有餘載、豈八萬軀の佛像のみならんや、豈千萬軸の經卷のみならんや、是本迹不二、水波同體なるものにあらずや、佛教若し國家に害ありて、生民に利あらずとせば、土は是れ神の國、人は是れ神の民なり、何すれぞ坐ながらに佛教の傳播を許容せん、蓋し神是を忌むと雖拒むこと能はず、千載の下諸君の力を借て是を妬害す

と爲んか、何ぞ其れ然らん。

昨日處士あり、予が室を叩いて再拜して告て曰く、近頃僕讀書の暇に少しく静坐を學ばんと欲す、動に静に人欲の制し難き事、狄國を治むるが如し、一日治むれば五日亂る、片時静にして長時動く、尋る時は痕迹なし、爵祿をも辭すべし、白刃をも蹈むべし、只人欲は制すべからず、僕是が爲に困倦起つ能はず、大師願くは愛憫して開示したまへと、余が曰く、嗟其事あらん、今時儒佛の學、人は是が爲に災厄せられて、克つ能はず、古人は能く其病因を知りて、根源を抜けども、今人は其病因を知らざる故に醫治する事能はず、終に死亡を取る、死亡を取るとは棄廢して、本志を失ふなり、處士の曰く、得て聞くべきや、予曰く、儒門には之を人欲と云ひ、釋氏には之を結使の煩惱と言ふ、共に之の一個の舊習々氣なり、常に根本無明の中に入りて竄る、之故に制し得る事能はざるなり、今時禪道佛法を修習する底、此黨間々多し、之を二乘聲聞の部類と云ふ、彼等の言に曰く、道は高遠なる事なし、行住坐臥の間を出でず、火は暖にして水は冷なり、只分別思想を盡さば足らん、何の參禪辨道を假らんと之れ彼の儒

家者流の道は彝倫の間を出てすとす輩と同一なり之を黯慧と名づけ病因と云ひ道を見ざるを病本と云ふ。

夫れ人は道を見るときは結使断じて人欲盡く譬は夜中途人ありて妖魅の爲に欺誑せられて衆苦逼迫せんに觸目皆妖魅にして廻避する處なかるべし然に漸く天明に到て太陽纔に照す時は群妖百怪悉く潜み隠れて搜索すれども得ず寔に之れ醉夢の覺るが如し須く知るべし妖魅を拂ふ事は太陽に過ぎたるはなし人欲を制する事は大道に超えたるはなきを人若し道を見ざる時は人欲結使根本無明の中に入り竄れ頼耶合識の間に潜んで動もすれば六賊を捉へ八邪を牽て千變萬化靈臺を混亂す心王之が爲に欺誑せられて安き事能はず觸目皆業障輪廻と化す恰も妖魅の夜途を惱すが如し一旦智光煥發し大道乍ち現前する時は惠日大に照耀して大地山河本有の明德と化し毘盧の全身と現して八識崩裂し無明碎破す此に於て結使断し人欲盡き賊壘破れて群賊空するが如く業障輪廻土を拂て點塵なし夫子は之を性相近く習相遠しと云へり。

少室曰く若し人佛道を成せんと欲せば先須く見性すべしと譬へは人ありて夢中に種々の苦患を受けんに百端を究むと雖も夢中に在りては救ふ事能はず夢中の苦を遁れんと欲せば夢を醒すに如くはなし今時儒釋の學人大道を見ずして煩惱を断せんとし人欲に克たんとす恰も之れ夢中に在りて種々方便し夢中の苦患を遁れんとするが如し轉々苦患を増すのみ罪は大道の淵源に徹せず相似口傳の道を以て得たりとするに在り或は涸轍の魚の一口の水を足れりとして大海を求めざるが如し寶藏論には此等の人を小に安んじて大に安き事を知らず喩へは痴鳥の窟に栖て深林を求めざるが如しと云ふ蓋し道を稻梁に喩へ人欲を稗秭に喩ふれば稗秭叢茂する時は稻梁自ら盡き稻梁繁茂する時は稗秭自ら隠るゝが如し此故に稗秭を盡さんと欲すれば道を見るに如くはなし稻梁若し稗秭の底に蔓埋せられて然して稗秭を制せんと欲するも豈得へけんや恰も人欲の底に蓋覆せられて人欲を制せんとするが如し。

愚者は常に山河天地を全うして人欲の苦域となし智者は常に山河大地を

空うして大道の眞體となし、已靈の明德となす。吾子若し人欲を制せん、欲  
 せは、急に須く道を見るべし。之を病因を知りて、病本を抜くと云ふ。處士欣然  
 として去る云々と、讀者儒禪の關係如何に解するや。徒に學究的頭腦を以て  
 側面的觀察を逞しくして、的なき處に箭を放たすんば、幸甚なり。



# 附 録

## 白隱禪師の著書

- 荆叢毒藥九卷
- 槐安國語五卷
- 息耕錄開筵普說一卷
- 寒山詩闡提記聞三卷
- 寶鑑胎照一卷
- 毒語心經一卷
- 寒林胎寶一卷 (以上漢文)
- 遠羅天笠四編
- 寶鏡窟記一卷
- 假名法語一卷
- 辻談義一卷

藻鹽草一卷

部

邊那以智語一卷

藪柑子一卷

鬼專使稿一卷

夜船閑話(白幽真人を訪ふ記)一卷

夜船閑話(防州侯に奉りし書)一卷

壁生草上下二卷

於仁安佐美一卷

八重葎(十句觀音經靈驗記)一卷

八重葎(四娘孝記)一卷

假名葎一卷

白隱禪師年譜二編(東嶺撰)

其外に安心ほこりたゞ記、大道ちよぼくれ、施行歌、子守唄、三教一致辯、藥病相治説、御洒落御前物語、御代の腹鼓、見性成佛丸方書、草取唄、寢惚氣、廻眼覺誌、主

心お婆粉引歌、おたふく女良粉引歌、與察女書等あり然れども多くは單編物の小冊子に過ぎず





# 白隱禪師傳

明治三十七年十一月十二日印刷

明治三十七年十一月三十日發行

教界偉人叢書第五編

白隱禪師傳 附  
並製四十五錢  
上製六十錢

著者 大崎龍淵

發行者 文明堂清水金右衛門

印刷者 大和屋吉岡嚴八

製本所 信陽堂



發行所 文明堂

賣捌所 興教書院 川瀨代助

東京市本郷四丁目五番地  
(電話下谷二〇二九番)

京都市西六條

名古屋本町

東京本郷春木町二丁目廿一番地

東京本郷四丁目五番地

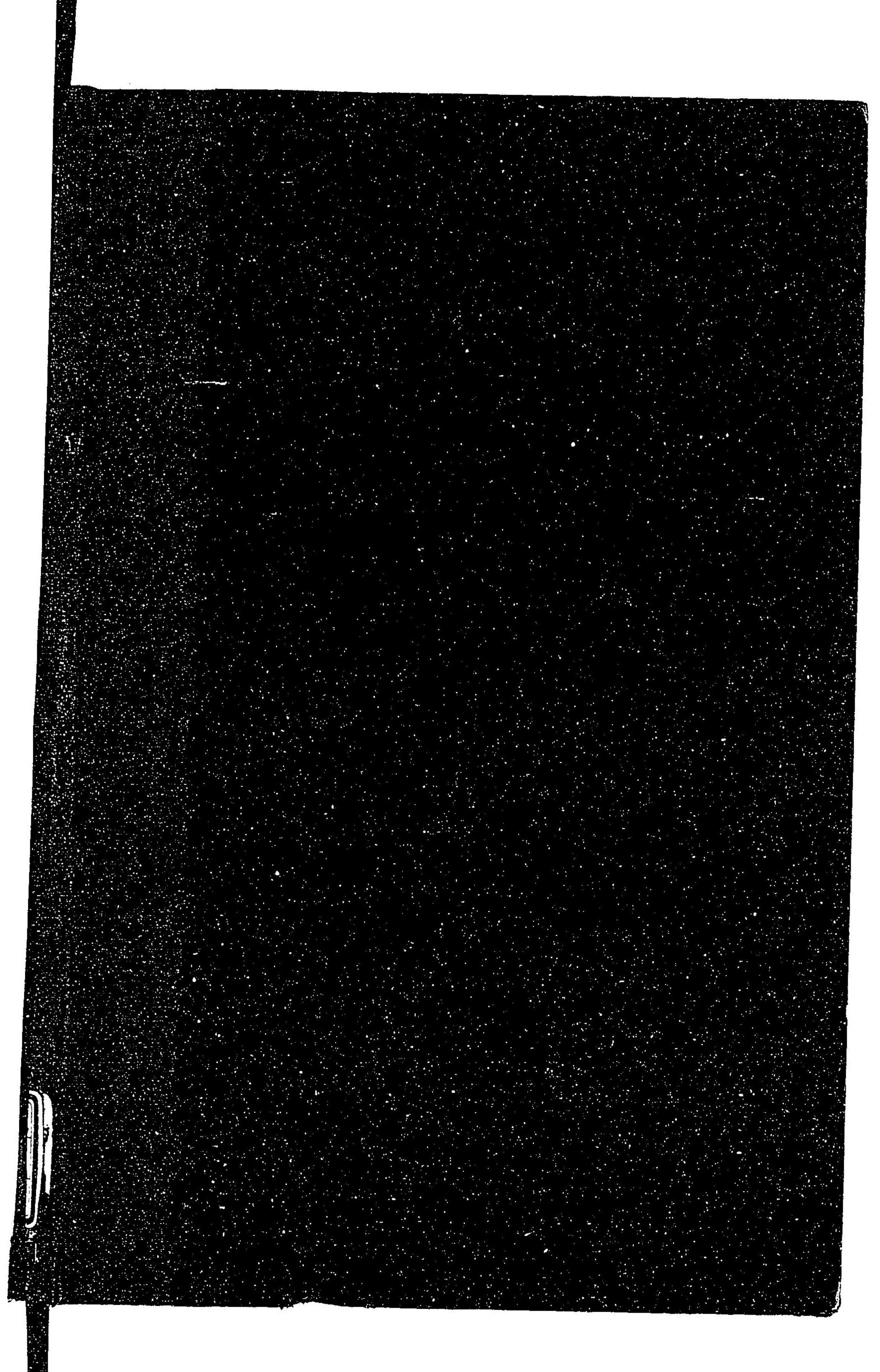
東京日本橋瀬戸物町六番地

(電話本局二四五)

文 明 堂 出 版 圖 書 大 賣 所

東京市	信濃國信濃町	越後三條町	樋口書店
東京市	越後國水原町	大坂市南本町	積文社
東京市	橫濱市吉田町	神戸市元町	日東館
東京市	京都市木屋町	山形市七日町	牧野書店
東京市	京都三條寺町	富山市太田口町	守川書店
東京市	大阪心齋橋	青森弘前市	今泉書店
東京市	越後國長岡町	山形縣鶴岡町	日向書店
東京市	金澤市安江町	千葉東金町	多田屋
東京市	周防國岩國町	甲府市柳町	柳正堂
東京市	越後國直江津町	熊本新町	長崎次郎
東京市	越後國新發田	日向國都城町	高美書店
東京市	大坂市安土町	豐後國大分町	甲斐治平
東京市	大阪淡町	静岡市吳服町	吉見書店
東京市	播磨國揖保郡	三重縣桑名町	郁文堂
東京市	福井縣福井市	岐阜縣大垣町	岡安助
東京市	秋田市茶町	若松市福島町	博向堂
東京市	金澤市元町	越後長岡	酒井書店
東京市	前橋市曲輪町	福岡市博多	眞海書店
東京市	名古屋宮町	佐賀市白山町	河內藏助
東京市	筑前國若松港	鹿兒島仲町	久永金藏
東京市	森江書店	萬松堂	
東京市	上田屋	有隣堂	
東京市	林平次郎	貝葉書院	
東京市	松村書店	聖書房	
東京市	目黒書店	覺張治平	
東京市	警強社	近田書店	
東京市	勉強堂	白銀伊兵衛	
東京市	興教院	柿村書店	
東京市	川瀨代助	萬松堂支店	
東京市	學海堂	積善社	
東京市	福音社	盛文館	
東京市	吉岡書店	竹內伊八郎	
東京市	北光社	中村六三郎	
東京市	東西堂	成見書店	
東京市	文會堂	宇都宮	
東京市	菊竹書店	喚乎堂	
東京市	武內書店	文星堂	
東京市	富貴堂	石松國吉	
東京市	積善館		

~~8~~ 188.8  
~~4~~ 0.73





019792-000-2

188.82-073ウ

白隠禪師伝

大崎 龍淵/著

M37.11

ABG-0613



25.10.27